

作物との対話

東京大学農学部教授 戸 莉 義 次

今日、「上農は草を見ずして草をとる」などという、抵抗を感じさせたり、阿呆らしいと笑われるだろう。それは、この言葉が持つ勤労精神鼓吹にカチンとくるからだと思う。勤労精神も、もっと高く評価されるべきものと信ずるが、それよりこの言葉の真髄は、「適期作業」の重要なことを教えていると考えるべきである。労少なくして功多き適期作業は、正に農作業の基本で、除草剤使用にあたって、播種前処理とか移植後1週間目処理というのと、少しも変わらない。昔の言葉を持ち出すと抵抗し、今の表現だと盲従する。真の意味、ものの本質を掴まない、うわすべりの行動は、実にコッケイである。

今どき、稲と語る篤農家といえは、古色蒼然たる頑固親父を連想する人が多い。確かに、篤農家のうちには自分の経験に固執して、他の意見を容れない人物もいたと思う。しかし、作物と話をすることは重要で、今までも、これからも、ますます作物との対話に力がいける筈であ

る。カミソリを持って田圃へ行き、稲株の根元を削って幼穂形成期を確認したり、籾数を調べて施肥量の多少を判定したりするのは、何れも作物との対話にはかならない。

稲と語ることの重要さは、昔も今も、また将来も変わらない。ただ、対話の方法が科学的になったというだけのことである。「はだして田圃へはいれ」「稲は足跡を欲しがっている」などの諺は、ゴム靴をはいて田にはいったのでは水温、地温はわからない。足跡の多いほどに田を見廻わって、稲の生育や環境条件を肌で感じとれという意味である。したがって、ゴム靴をはいていても、寒暖計で水温や地温を毎日調べるのが近代的ということになる。

わが国近代農業における最大の変化は、農民が技術者に成長したことである。日本農民は単なる技術者ではない。その農民の成長には、科学技術があずかって大きいが、同時に古老の至言の真意の古典的な、言い得て妙なるを忘れてはなるまい。

年 頭 の 辞

農林省農林水産技術会議事務局 調査官 仮 谷 桂

昨年来、産業界や金融界では大型併合が新聞、雑誌を賑わしている。強くて力のあるものが勝ち進んでいく以上、この傾向は自然の推移である。

原始産業の姿を残している農業においては、他の産業のように容易に併合、拡大ができないことはわかっているが、それでも今後の発展をとげるためには、当然規模の拡大が大切なこ

とはいうまでもない。とくに経営規模が小さいわが国では、この面での発展がおくれており、最近トラクター等の高性能機械や資材によって、生産の能率が漸く高まりつつある。

一方、一時停滞していた米の単位面積当り収量が再び高まり、遂に需要を超えるに至ったが、その大きな理由は、生産技術の発達と普及によるものといえる。すなわち、肥料を与えることから始まった近代的な作物栽培は、肥料の型態、肥料の施用法等、施肥技術に関する数多くの改善と、施肥に適した品種や施肥にともなう多くの病虫害への対策等、施肥条件を充分に生かす技術の改善によって、生産を向上してきた。稲生産費調査によると、昨今は稲作に要する時間が減少しつつある中で、追肥回数の増加によって施肥の時間が増加しているのは、この辺の

事情を示すものであるが、今後はさらに生産性の向上を図りながら、生産を高めてゆかねばならないこと、とくに生産性を高めることは大切であると考ええる。しかしながら、一般的に言って、作業の能率を高めながら、収量を高めることは、技術が高度化された現在では、あい伴わないことが多く、とくに収量の向上を重点に発達してきたわが国では、生産を落とさずに高効率化を図ることが必ずしも容易ではないかもしれない。

この要請に応えうるか、どうかは、これからの新しい技術にかゝっていると思うが、それは上記した、施肥を中心とした技術から一步前進したものであるかどうかはわからないが、少なくとも今までの技術の系列から飛躍したものであろう。

新 年 の 挨拶

農薬工業会 会長 西 圭 一

あけましておめでとうございます。

昨年はわが国に除草剤が導入されてから満20年に当り、時あたかも日本植物調節剤研究協会創立5周年ということで有意義な記念行事をとり行なわれたのでありますが、ご生誕の際、いささか助産のお手伝い申しあげた私どももいたしましたし、まことにご同慶にたえません。

昨今“総合農政”という旗印で、日本の農業のあり方について凡ゆる角度から検討が進められておりますが、基盤となるものは合理的、安定的農作業による生産性の向上にあること申すまでもないことでありまして、このための農薬施用による除草、病虫害防除の使命は、ますます重要視されねばならないものと確信いたして

おります。殊に労働力節減に果す除草剤の役割は、稲作を始め果樹、そさい、森林、牧野などきわめて幅広い分野において評価の高い真価が期待されております。

私ども直接農薬の製造に携わる側といたしましては、一層研さんを重ね、安全且つ卓効ある薬剤“愛される農薬”の開発に努力し、これからの農業推移に即応できるよう対処いたす覚悟でございます。日本植物調節剤研究協会関係者の変わらぬご指導、ご便達をお願い申し上げますとともに、今後ますます発展されて、流動する農業の実体に対応する除草あるいは生育調整について、適切な技術のご指導役を充分に果たれることを念願して新年のご挨拶いたします。